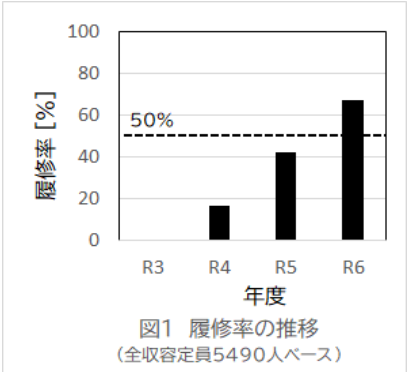
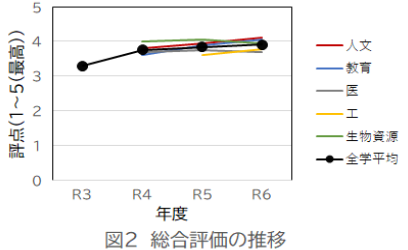
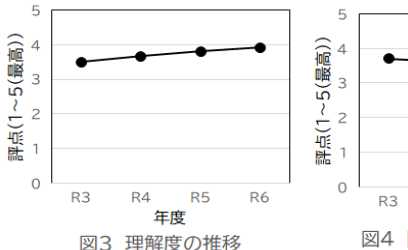
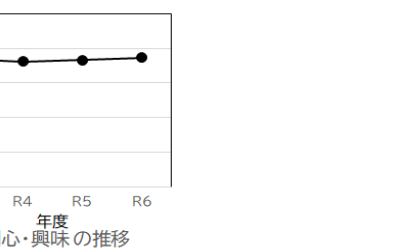
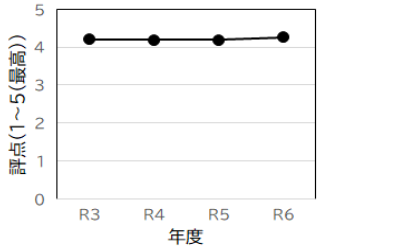
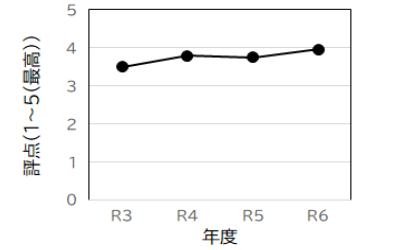
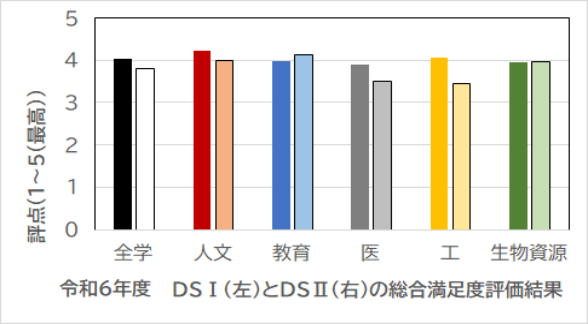


自己点検・評価（令和6年度プログラム実施分）

自己点検・評価の視点	評価総括	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点		
プログラムの履修・修得状況	良好 (目標50%を達成)	令和6年度は、本学の収容定員5490人（入学定員1310人）に対してほぼ全員が本プログラムを受講している。図1に、本プログラム開始（令和3年度）からの収容定員に対する累積履修率の推移を示す。初年度0.4％、2年目約17％、3年目約42％となり、令和6年度には約67％に達した（50％を超えた）。受講生の9割以上の学生が必修2科目4単位を修得することができていることから、履修率、履修状況ともに良好と判断した。  図1 履修率の推移 (全収容定員5490人ベース)
学修成果	良好	授業アンケート（1～5点評価）の結果、データサイエンスⅠの総合満足度は4.02（人文4.2、教育4.0、医3.9、工学4.1、および生物資源3.9）、データサイエンスⅡは3.81（人文4.0、教育4.1、医3.5、工学3.5、および生物資源4.0）であり、全体的に満足度は高く、どの学部も高水準を維持できている。個別項目で見ると、ⅠとⅡの理解度は総合評価よりわずかに及ばず3.9と3.7、新知識獲得に関しては4.4と4.1と総合満足度を超える評価値であった。理解度を高める工夫は必要かもしれないが高水準であり、かつ新知識獲得に関する評価が向上していることから、十分な学修効果が得られていると判断できる。参考までに、図2、図3および図4に全学と各学部の総合満足度と理解度および新知識獲得に関する学生の評価推移を示す。プログラム開始後徐々に向上・高水準を維持できていることがわかる。  図2 総合評価の推移  図3 理解度の推移  図4 関心・興味の推移
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	概ね良好	上記で示したように、理解度は令和5年度評価に比べてわずかに及ばなかった。しかし、総合満足度は高水準を維持できおり、関心・興味は向上し、その他図5と図6に示したように新知識（新しい知識を獲得したこと）の評価や自己研鑽（学んだ内容に対して自ら調査・活用すること）に関する評価は高く、それぞれ5段階評価で4.3と4.0であった。学生は十分に理解し関心・興味をもって自己調査・活用をしているものと思われる。  図5 新しい知識を獲得したことの評価推移  図6 自己研鑽(自ら調査・活用)の推移
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	概ね良好と推察	授業アンケートの中で直接的に推奨度を問う項目は設けていないが、上述のように「新しい知識の習得」はデータサイエンスⅠ、Ⅱともに5段階評価で4を超える評価を得た。後輩等他の学生への推奨度も高いのではないかと推察される。ただし、データサイエンスⅠとⅡを分けた総合評価を学部別に見た結果（図6）、より直接的に大学の授業で活用できる内容を学修するDSⅠ（情報リテラシーとデータリテラシー）に対してDSⅡ（各学部で今後必要とされるスキルを体験重視で学ぶ）の満足度が低い傾向がみられる。とくに専門色の強い医学（医用統計・医用機器中心）と工学（プログラミング中心）で顕著であることから、DSⅡの学修内容の活用に関して受講生にイメージしやすくする（と後輩に説明ができる）ような工夫が必要かもしれない。ただし、総じて評価は高水準であることから、後輩等他の学生への推奨度は高いと思われる。  令和6年度 DSⅠ(左)とDSⅡ(右)の総合満足度評価結果

	全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	大きく改善	改組の学年進行中でカリキュラム変更ができなかった工学部を加え、人文、教育、医、生物資源学部の全学部で「データサイエンスⅠ」と「データサイエンスⅡ」の2科目4単位必修化が達成できた。その結果、プログラム履修率は大学学部学生の入学定員に対して約24%となった。今後も計画的に履修率の向上が見込まれる。
学外からの視点			
	教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	未実施 (今後実施予定)	データサイエンス実践演習など、地元企業との連携の中で、本学のデータサイエンス学修プログラムに関する意見を頂戴する。また、卒業生アンケートなどを通じて学習効果を評価するが、データサイエンス学修プログラムを修了した学生が就職したあとのデータが必要であるため、アンケート分析は未実施である。
	産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	未実施 (今後実施予定)	地元企業との連携事業を通じて意見などを頂戴する予定である。また、データサイエンスセミナー講師などからも頂戴する。
	数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	積極的な取り組み	数理・データサイエンス館（通称CeMDS＝セムズ館）において、体験型学習を支援すること、たとえば3Dプリンタなどの機器や実習・研修スペースなども提供しており、データサイエンスⅡの授業の中での活用も行われている（タンパク質の立体構造を3Dで観察、3Dプリンタを用いて立体構造を理解するなど）。また、学生同士で問題解決を図るための仕組みとしてCeMDSにて運営していたサポートデスク（大学院生スタッフが学部生の相談に応じる）の機能を、より上位の組織である情報基盤センターにて運営する体制とした。これらの情報系組織と全学の教育・学生支援組織（教育推進・学生支援機構 教育企画部門）とで、データサイエンス学修プログラムの周知やデータサイエンスセミナーなど、在学生と教職員への啓蒙活動を行い、数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を大学構成員全員に対して理解してもらうことの努力を行っている。また、本プログラムの修了要件外ではあるが、複数学部教員による現代科学理解特殊講義（データサイエンスAI）や、受講者数が少ないものの授業アンケート評価は非常に高い（総合満足度5）情報基盤センター教員によるデータサイエンスⅢなど、DSⅠ・Ⅱに続き（または並行して）学ぶことの楽しさや意義を伝えることができる可能性を持った授業が整備できつつある。
	内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	標準的な取り組み	内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすることができるよう、教育推進・学生支援機構 教育企画部門にてデータサイエンス教育と他大学・地元企業などとの連携事業を統括することで、データサイエンスⅠとデータサイエンスⅡの授業内容改善などを検討する。